イラン訪問雑感（2018/8/28～9/2）

初めてのイラン訪問。現在、米国から制裁中で、イスラエルとは敵対しており、危険な国という印象を持つ。しかし、結論から言うと、国内はいたって平和で（少なくとも表面的には）、もし行く機会があればぜひ行くべきである。

今回、Royan 研究所主催の International Congress での講演に招待され、イランを訪問した。テヘラン空港に到着後、まず保険に入らされてから、ビザを申請。事前にもらっていた visa authorization 番号とパスポートを提出。２０～３０分後に無事、ビザ取得完了。その後、パスポート・コントロールを通り、荷物を受け取って入国。全体で３０～４０分くらいで終了。他国への入国と比べて所要時間はあまり変わらない。事前に写真を送ってくれていたお迎えの人（２人）が待っていてくれた。お迎えの人に手伝ってもらって空港の両替所で 100 ユーロをイラン通貨に交換。約 1200 万リアルの札束を受け取る。１円が 1000 リアルくらい。合流したオーストラリア人が、”Oh, you are a millionaire.”と言っていた。

10 万リアル札 100 枚の束と 50 万リアル札

空港からホテルまで最初は快適なドライブだったが、街中に入ると、皆さんきつい運転をしていた（車は圧倒的にプジョーが多い）。車線を示す線が消えていたりするので、本来２車線のところを普通に車が３列に並んでいる。また、車の間を自在に縫って走るバイク、反対車線を平気で逆走する車、車の多い道路を堂々と横断する歩行者等々、道路状況は混沌とした感じであるが、街全体は平和で活気があった。初日は、ホテルに到着後、発表の準備をしてから睡眠。

翌日、朝食後、ホテルにお迎えのバスが来ていた。学会場は立派な建物。前から２列目に着席。しばらくすると、事前に accompanying person をしますとメールを送ってくれていた大学院博士課程の学生さんが挨拶に来てくれた。何でも困ったことやどこかに観光に行きたいならいつでも言ってくれとのこと。このような hospitality は初めての経験。アラビア語の記載しかない所も多々あるので、一人で出かけて迷子になられたら大変という配慮もあるのだろう。

開会式が始まる。ステージの前には花と参加者の国旗が飾られていた。日本国旗もあった。まず、全員起立で国歌斉唱。同時に革命を讃えるビデオ上映。その後、最前列に座っていた偉い人達の挨拶やイランのサイエンスの現状説明。数年前の論文発表数は世界全体で 19 位であったが、最新の調査では 14 位になったとのこと。いずれもアラブ諸国の中ではトップであることを強調していた。ちなみにその調査では、数年前は①米国、②中国、③日本であったが、最新は①米国、②中国、③ドイツ、④日本となっており、日本の凋落傾向が気になった。挨拶の後、イラ

ンの楽器を使った演奏、歌が 20 分ほどあり、開会式終了。その後、ようやく研究発表が始まる。

イランの研究はどちらかというと応用指向。選ばれた発表なので、レベルは日本国内の学会と比べて遜色はない。ただ、海外招待者の基礎研究発表に対するイラン人研究者からの質問はあまりなく、内容をどこまで理解できているかは不明。私は神経幹細胞に関する基礎研究を発表したが、海外招待研究者からいくつか質問があったものの、残念ながらイラン人研究者からは無かった。最新の研究成果を学びたいという強い意欲はあるが、基礎研究を深く理解し、実践するには、海外とのより広い交流が必要だろう。政治や宗教はさておき、生物系研究者の目線でみると、イラン人研究者も新たな発見をして科学の発展に貢献したい、医学系なら医療の発展につなげたいという意欲や目的は共通で、そこに違いは感じられなかった。学会中、Royan 研究所のラボ見学会があった。設備は古いものが多いが、大体の実験はできそう。遺伝子改変マウスの作製も独自にできるようになっていた。海外の研究所と差があるかどうか幾度か尋ねられたが、日本の平均的な研究室よりは充実してそうであった。ただ、輸入機器が故障した時、アメリカ製の場合は直接修理を依頼できないので大変だと言っていた。

イランの方は皆さんたいへん親切であった。特に、アメリカから制裁を受け孤立している時期にイランに来てくれてたいへん感謝しますという感じだった。とにかく、イランのことをよく知ってほしい、気に入ってほしいという気持ちが強く伝わってきた。また、多くの人が日本に憧れている様子で、日本に留学したいと言っていた。制裁を受けているにもかかわらずアメリカに憧れている方も多く、意外だった。

学会参加者の半分くらいは女性だろうか。女性研究者が多くて驚いた。全身黒づくめの女性は２～３割くらいか。多くの方は、頭から胸あたりまで黒く覆っていたが、下にグレー系あるいは明るい色の服を着ていた。明るい色のスカーフを頭に半分程度被っている方も結構いた。ただし、全員ズボンで、スカートの方はいなかった。男性は、偉い方を除いて、ラフな服装が多かった（さすがに半ズボンの人は見かけなかったが）。

Accompanying person の学生さんはいつも私のところにやってきて、何か困ったことがないかどうか確認しにきてくれた。２日目の昼休みにはこの学生さんの研究内容を説明してもらった。サルの脊髄損傷の治療を目指した研究。時間とお金、技術を必要とする実験で、かなりレベルの高い内容に驚いた。彼女もいずれ学位を取ったら日本に留学したいと言っていた。彼女の研究内容は、海外でも評価されるだろう。

閉会式では、各種挨拶とともに、イランの学会が出版している雑誌 Cell Journal の現状説明があった。これは Cell ではありませんよというジョークの後、いやしかし将来的には Cell 並みになってほしいとの期待が述べられた。一昨年の impact factor は１台だが、昨年は２台になったと喜んでいた。最後に、優秀発表者に加えて海外からの招待講演者もステージ上に呼ばれ、表彰と記念品贈呈があった。その後、記念写真の撮影があり、終了。

学会の懇親会@Royan 研究所

午後はフリータイムだったので、前日に学生さんから希望を聞かれた際にテヘラン観光したい旨を伝えていたら、彼女の友人（女性）が車を運転して迎えに来てくれた。彼女のボーイフレンドも交えて４人でテヘラン観光をした。ボーイフレンドもたいへん優しい好青年で、私の重いバッグをずっと運んでくれた。今は公園になっている元宮殿に連れていってもらい、見学。かなり広くて、午後いっぱいかかった。彼女の友人はスカーフを廃止にしてほしいと言っていたが、宗教上の制約と女性が求める自由との葛藤があるようだった。そういえば、イランの女性は（宗教上の理由で）私と握手をしなかったが、彼女だけは自然に握手をしてくれた。

その後、伝統的なレストランで夕食。４人でカーペットに座り、料理を囲んで食事。たいへん美味しかった。生演奏と歌もあった。私が支払いをしようとしたら激しく止められ、あなたはゲストだから受け取れないと言われた。お客をもてなしたいという強い気持ちが現れていた。

出国時、空港ターミナルではまずセキュリティを通ってから航空会社のカウンターに行くようになっていた。他国よりはセキュリティは厳しめか。Economy 用のセキュリティは長蛇の列だったが、First/Business 用は誰も並んでいなかった。First/Business 用セキュリティを通過してカウンターに向かう。まだ、4 時間前なのでカウンターに係りの者は誰もいない。エコノミーのカウンターはもう１０人くらい並んでいたが、ビジネスのカウンターは誰も並んでいない。他にどこも行くところがなさそうなので、仕方なくそこで立っていたら、どこからともなく係官が来て、お前はビジネスクラスかと聞いてきた。Yes と答えると、「それならここではないよ」と言って、C.I.P.を知っているかと聞いてきた。知らないと答えると、私に付いてきなさいと言う。せっかくセキュリティを通ったのに、また建物の外に連れていかれる。あっちだと言われ、指差す方を向くと、確かに空港ターミナルから 200～300m くらい離れたところに C.I.P.と書かれた大きな立派なビルがある。あそこに行けと、車に乗せられ連れて行かれた。また、セキュリティを通過して建物に入るとパスポート、E チケット、荷物を預けてから、上に行けと言われる。上の階に上がったところ、先ほどの雑踏とは別世界の静かで広いラウンジがあった。昔、王族ご一行様が使っていたのだろうか。料理もふんだんにあり、時間がくるまで、ここでリラックスして待機。2～3 時間後に係員がチケットを持ってきた。30～40 分前に搭乗の案内があり、また手荷物検査を受けた後、出国管理官からパスポートを渡される。その後、バスに乗り、飛行機まで移動。エコノミーとビジネスとでここまで扱いに差のある空港は初めて。

エコノミーの雑踏とは別世界の静かで広いラウンジ(in C.I.P.)

学会終了後、海外研究者は全員２泊３日のイスファハンとシラス（世界遺産がある）への観光旅行に招待された。残念ながら、私は日本ですぐに用事があったため、この旅行に参加できなかった。参加した他の海外研究者から非常に素晴らしかったとのメールをもらい、次回、イラン訪問の機会があれば、ぜひここを訪れたいと思った次第。